

## おとなと子どもの間

——「まだ子どもだから」を見なおす——

関口 はつ江

最近の学生を見ていると、ことばも行動も小学生の段階でとまってしまっているように思える。事実保育科の学生が幼稚園等で初めて実習した時にぎまって発するのは「幼児がこんなにいるいろいろなことを知っていたり、ひとりでできるとは思わなかった。」との驚きのことばである。それだけ自分達におとならしい深い思いや心づかい、行動力がないことの自覚や恥らしいの気持もなく、おとなに頼ることなく自

分達で遊び、また時には相手を鋭く観察して、その内側を洞察する幼児を子どもらしくないと言わんばかりに批評する学生も少なくない。

若い親の子育てに対して「子どもが子どもを育てているようだ。」と評され、成人に達した若者が親の援助なしには生活できにくくなっていく現象が取沙汰されてからかなりの年が経っているのに、その状況は一向に改善される気配はなく、逆に益々強くな

っているように見える。

子どもがおとなに育ちにくい状況は、世界中が変化のあらしに巻き込まれ、さまざまな新しい社会現象が起っていることの一部であり、トフラーが「内的変化の方が深遠なため、加速的推進力がスピードをあげるにつれて、われわれは今日まで人間と社会を規制してきた範囲内で生活できるかどうかためされることになるだろう。……未来の衝撃と名づけたものに打ちひしがれずに生存し、またそれを避けるためにも、ひとりひとりが無限に今まで以上に適応性をもち……人々はみずからしつかりと地に足をつけようと思えば、まったく新しい方法を探し出さなければならぬ」と述べるような、文化の急速な進歩による社会の激変に内的変化が対応しきれない状態による、個々の責任に帰すことのできない、抗しきれない時代の趨勢であるとしても、否、そうであるからこそ、子どもを育てることが仕事である保育の現場においては、何よりもまず、子どもが内側

から成熟することができるようになることに全力を注がなければならないと思う。

### 子どもの領分

幼い日に、手際よく料理を作り、一日にして着物を縫い上げる母親に目を見張り、何でもよく知っていて応えてくれる父親に感心して、自分も大きくなったらあのようになれるかとあこがれ、少女時代に娘らしい物やおとなとの同席を願っても、「あなたにはまだ早い。もっと大きくなったらね。」と諭され、子どもの世界におしもどされて、どんなに早く大きくなることを願ったことか。かつては、子ども達は「いくつになったら」「これができるようになったら」「学校を終えたら」……と、子どもではさせてもらえないこと、子どもだからしてもいいことを沢山もっていた。

分別やわきまえがなければ、責任が持てなければ、入れない世界を先に見、身近なおとなを自分と

は違う、と仰ぎ見ながら、おとなになるために、ひたすら子ども時代を熱心に生きることが成熟しようとする力を生み出すものと思われるのだが。

### おとならしい在り様を

現代社会は子どももおとなも共に生活を楽しみ、また学習することが期待されている。社会の急速な変化は、おとなが子どもの頃経験しなかった新しいことを次々と提供してくる。かつての経験は子どもに誇れる知識や技術とはならず、おとなも子どもと一緒に物事に挑み、学ばなければならない現状では、子どもはおとなを頼りにできないばかりか、時には子どもを押しつけて、なりふりかまわず目新しい文化を享受したいおとなの姿に失望もするであろう。

しかし、育てる人としてのおとながいなければ、子どもは育つための拠をもてず、おとならしい在り様を知ることができまい。現代の昔話離れもまた、

子どもからおとなというものを知る機会を奪っているようである。物事にかかわる方向と学び方に過去の経験を生かすおとなの知恵や、育とうとする子どもの欲求を満し、他人を見守る暖かい眼ざし、強い自制心や周りへの心配りなどを必要としているに違いない。

### 共に在りたい気持ち

「先生はどうして帽子をかぶって来ないの？」あまり好きでない夏帽子をかぶらされて登園した六月初めの朝、私の顔をしみじみと眺めての四才児の挨拶であった。一緒に幼稚園に通う人に子どもはこんなことを寄せて、同じように思っていてくれることをあらためて感じさせられる。おとなが子どもに心を寄せるよりも、子ども達はもっと直接的に共に在ろうとしていることに気づかされる。それは自分と同じ存在だからではなく、自分とは違うおとなの人であるからこそ――私は幼稚園では園児からはかなり遠

い存在に違いないのだから一であろう。

子どもからおとなに向けた眼ざしを、おとながしつかりと受けとめて応えることによって、子どもは自分がまだ子どもであることや、自分とは異なるおとなの世界であることを親しみをもって感じとり、受け入れることであろう。ローレンツは現代人が人間同志の接触を故意に絶ち、親しみの感情をわずかの人に集中しなければ生きられない状態にあることを指摘しているが、おとなの乱されまいとする心の不安定さもまた子どもの育ちを妨げる一因となつていよう。

### 自分で育つ

スカートの前を二ヶ所つまんで、その中に小石を五、六個入れ、かかえながら小走りに来た女兒が二人、「これは宝石なの。つるつるでしょ。」と一つを取り出してさわらせてくれる。だまってついて行くと、歩道橋の上で手すりの下を探している。「昨日

置いて行ったのになくなっちゃった。……ここに置いて行こう。」各々が一個ずついいねいに隅に置いて園に向つて走り去る。きれいな石を宝物に見立てて自分の通つた所に置いて行く。次の日それを見つけた時、昨日の自分とそこで出会うのであるか。子どもは自分のしたことを確かめつつ、昨日と違う今日の自分を感じることであろう。小石を宝石にできる輝しい今日、しかし明日はもっと素晴らしい宝物を見つけるかもしれない。何かができなかった自分とできるとなつた自分、心の狭かつた自分と広くなつた自分、自らの育ちを内に感じる事ができるのは、自らの力で変化した時であらうし、自分の成長の自覚の積み重ねこそが、成熟の大切な源の一つであると考えられる。

### 未熟さの自覚

現在、保育の現場は教育過熱とも言える熱心な指導が行われている。少し誇張するなら、もし子ども

が望むなら、音楽、文学、科学、数学、美術、伝統文化の諸様式から、現代が生み出した機械器具の操作に至るまで、あらゆるものが学べる時代である。

かなり高度なシステムや複雑な技術が幼児にも習得できるような指導法の工夫はよくなされて、「子どもが喜んで」学んでいると言われている。本人達が心身共に未熟な状態にありながら、やりたがるから、やらせたいから、やればできるから、早くからしないと間に合わないから、と特殊な活動が子どもの生活に取り入れられ、手軽に経験させている。しかし、それで子どもを発達させ、教育していると考えるのは大変な錯覚である。子どもの成長への必要感をそいでいるに違いないからである。

プロイラーのように、外側だけおとなの人間を作れることは、経験を次々に並べて、させて行けばできるであろう。しかし、内側から外側まで全部おとなの人間を作るためには、自らの力で世界を広げ、自

己を深める経験を積み上げなければならない。いつか、主体性のない見せかけのおとなが、本物のおとなに支配される社会ができるのでは、と危惧の念を抱くのはうがちすぎた見方であろうか。

良心的な保育者であるならば、保育者の興味や思いつきで、新しい活動を並べ立てるような保育はとてできないと思うのであるが、如何なものであろうか。

(郡山女子大短期大学)

#### 引用・参考文献

- A・トフラー「未来の衝撃」中公文庫
- K・ハインツ・マレ「おとなの発見」みすず書房
- K・ローレンツ「文明化した人間の八つの大罪」思索社
- 津守真「保育の体験と思索」大日本図書